



ルイスカーン

観た人は誰もが絶賛するキンベル美術館。2013年にはレンゾ・ピアノ設計の新館が完成。どうしても比べてしまうが、美術館が上手いピアノを選ぶことで◎



バラガン

これほどまでに観る者に感動を与える建築があるだろうか...と思わせるバラガン。サンクリストバル廟舎、カプチーナス修道院、ヒラルディ邸、自邸を見学



現代建築

写真はメキシコの新鋭フェルナンド・ロメロ作品。ガラスの最新レム・コールハース作品、メキシコシティではアルベルト・カラチのバスコンセル図書館。



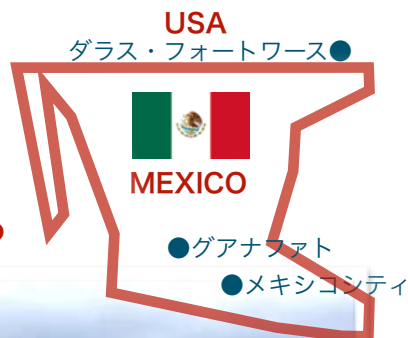
グアナファト

シティの北370km、人口7万5千人。昔は銀の採掘で繁栄、今は大学町。スペイン植民地時代の建築が残り、そのパステルカラーの街並は圧巻（下写真）だった

南雄三ツアー2016

9月25日 -10月1日

Dallas, Fort Worth & Mexico City, Guanajuato

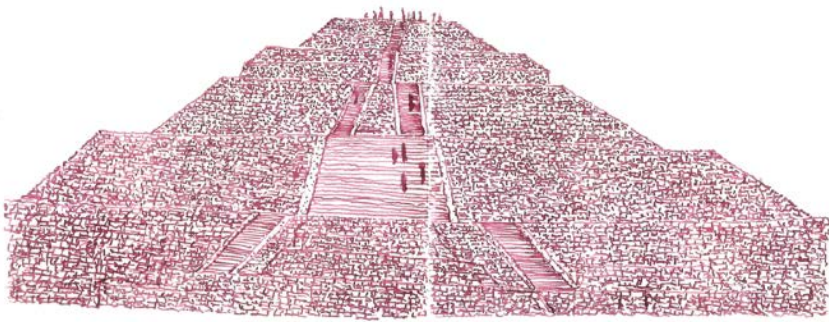


パステルカラーが眩しいグアナファトの街

バラガンに酔い、グアナファトに目眩

2016年の南ツアーは16年振りにメキシコ。経由するダラス・フォートワースでカーンのキンベル美術館と現代建築、メキシコシティではバラガンと構造設計の天才カンデラの教会3作とアルベルト・カラチのバスコンセル図書館、更にはフェルナンド・ロメロのソウマヤ美術館を観て、そしてパステルカラーの街並が見事な世界遺産の街グアナファトを見て回りました。つまり省エネ関連のテクニカルは一切なしのデザイン探訪。なのにどっしりと胸を熱くさせ、頭をパンパンにさせた7日間の旅でした。私も添乗員の山崎もメキシコには精通しておらず雨期に実施。ダラスできえ曇りで、シティに入った夜は激しいスコール。でも南雄三の晴れ念力で、絶対に欲しかった「ヒラルディ邸での晴れ」を実現する他、日平均1.5万歩を楽しませる好天気。メキシコの治安はリオより悪い...という情報で、南ツアーの常識「独り飯」を撤回してみんなで食事。でもグアナファトでは脱走する者の数が上回り...やっぱり南ツアーは自由が原則。

テオティワカン



テオティワカンとは神が集う場所という意味で、巨大な宗教都市の遺跡。BC2～6世紀まで存在し、最盛期は15～20万人が都市国家を形成、同時期のローマに劣らぬ規模だった。みんなで月のピラミッドと太陽のピラミッドを登ったが、ゼイゼイと息が上がった。それでも巨大なパワースポットで貰ったエネルギーで太陽のピラミッドをスケッチ。

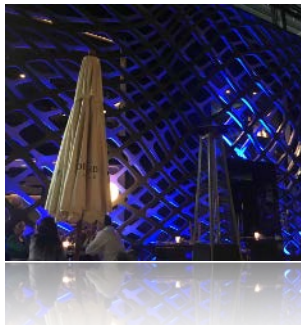
ケッツアルトの巣

Javier Senosiain (ハビエル・セノシアン) 設計の環境共生建築。入り口はまるでガウディ。でも広大な敷地にきれいな庭をつくり、そこに蛇がうねるように集合住宅を建てるのはセノシアンならでわ。アステカ神話にでてくる神(ケッツアルト)をイメージしている。庭は毎日6名の庭師で整備されている。



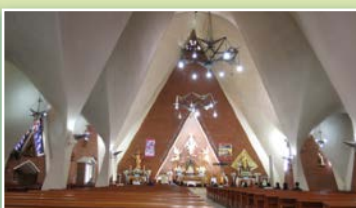
TORITORI

メキシコシティの高級エリア・ポランコ地区にある日本食レストラン。メキシコの新鋭建築家Michel Rojkind設計で2011年に完成。2011年に米建築誌Interior Designのレストラン部門で最優秀内装デザイン賞受賞。建物が面白いだけでなく料理も素晴らしい。乗り付けるのは高級車ばかり。



フレデリック・カンデラの教会3作

双曲幾何の建築学的表象であるHP (ハイパーボリック・パラボロイダル= 双曲放物面的シェル構造)。何だか難しいが、結果はそのまま難解で、どうして構造が成り立っているのか分からなくてオロオロ。でも大きな鉄骨や大断面の木材が重いということのない薄い構造体はとても流麗。構造美を派手に見せつけるカラトラバとは違った魅力がある。しかもITに頼れなかった時代の神秘を駆り立てて、恐るべしカンデラ・



サンタモニカ教会

メダーシャ・ミラグロッサ教会

サンビセンテ・デ・パウロ教会

シティの現代建築



CAMINO REAL HOTEL

Ricardo Legorreta設計。バラガンを意識していないというが、大きなホテルで部屋までは迷路のよう。その道程に水や黄色の格子を配して、迷路自体を遊んでいる。やっぱりバラガンじゃないのか。



ソウマヤ美術館

Fernando Romero設計。外観の面白さだけでなく中身が凄い。さすがに世界一の金持カルロス・スリム氏の所蔵。上からグルグル降りるが、グッゲンハイムと違って中央は吹抜ではなく床。展示物は床の上に楕状の壁に飾られる。



バスコンセル図書館

世界一興味深い図書館に選ばれた。国立で自然光利用だから入館は5時半まで。自然光利用のために縦に長く吹抜の帯ができる。棚を多くするために棚は吹抜にはみ出し、その自動倉庫のような姿がとても面白い。読書スペースが大きくてうらやましく、警備も凄くて警察が入っている。見学時は曇りだったが十分に明るく、雨期らしく静かに読書を楽しむ雰囲気だった。



Lous Barragan Morfin
(1902-88)

グアダラハラに裕福な家に生まれ、野山を馬で駆け回る。家が破綻してシティに出る。モダニズムで集合住宅を設計。分譲で稼ぐが途中で投げ出す。欧州旅行で庭の魅力を知る。建築は独学でスケッチで指示。敬虔なクリスチャンで生涯独身。建築史に名は



カプチーナス礼拝堂

16年前に来た時は理想的に晴れて、しかも中庭は写真も撮れたのに、今回は怖いシスターの監視付きで、メモもスケッチもさせてもらえない。礼拝堂の中ではガイドさんが小声の解説。でもこの方がずっと美しくみえた。バラガンがその存在を世の中に知らしめた光と色の美学。全体をアートにしてしまう・・・などという表現は愚かで、バラガンしてしまうといわなければいけないのだろう。



プール室…上部は吹抜、意外にプールは深い

サテライトタワー

画家のヘスス・レイエス・フェレイラと彫刻家マティアス・ゲーリッツとの共同作業。古い人間なら集団就職の子供達を喜ばせたお化け煙突を思い出す。お化け煙突はただの工場の煙突でも、子供たちの哀愁と夢の象徴だったが、バラガンはシティの象徴を単純な塔にパステルカラーを塗ってみせた。雑然としたシティの中でどんな意味を込めたのだろう。



サンクリストバルの厩舎

ただ単純な色と形をもった壁が、恐ろしいほどに魅力的な空間を作り出す。馬とピンクは違和感なのに、馬がピンクの壁の前を歩く姿を想像すると幻想的ですらある。それを助長するのが大きくて浅いプールで、馬の汚れを落とす意味をもちながら、まるで公園の噴水のように人まで和ませる。こうして派手な色と清潔と土や樹木の自然がみごとに調和して、バラガンの世界を作り出す。しばらくはバラガンの空気に浸っていたいと思った。

ヒラルディ邸

黄色が支配する回廊の先に、目当ての「プールのある部屋」がある。わかりきったことなのに、ドアが開いて青と赤が飛び込んでくると、ワッと大きな歓声が上がった。回廊のスリット窓が黄色く塗られていたのは、黄色の光をつくるだけでなく、中庭をみせないで、ドアの先に気持を集中させようという演出だったに違いない。

プールの部屋の隣には、ハカラダの木がある中庭がある。とても魅力的な空間なのに、誰もがプールに夢中になっている。我に返って、中庭と部屋、プールとテーブルの置かれた床に目を向けると。それぞれのスペースの割り合いが絶妙であることと、それぞれの大きさが心地よいことを知る。この部屋は食事もできるが生活圏ではない。ただ客を迎える部屋。赤いコンクリートの板はいわば床の間の掛け軸で、ドアを開けたら目に飛び込む位置にある。それほどまでにドアを開けた時の劇的な瞬間を演出するのに夢中になっているバラガンの顔はどんなだっただろう。

でも、部屋に入った後の演出はどうするのか。視線は中庭に向かうのだろう。そして日の動き任せて光りがプールに差し込み、彷徨う様に話題は移り、建築が時間軸を得て躍動する。ここでプールが意味をもつことになる。ドアを開けた瞬間の衝撃にプールは不要だった。バラガンはこうして建築に物語をつかった。物語には内向きの静寂が必要である…外から閉鎖された空間。でもただ高い塀で囲まれた空間は息苦しい。そこにハカラダの大きな木があって、自分と社会と自然をさりげなく結びつけてくれる。10年も設計から遠ざかっていたバラガンだが、このジャカラダの木に心を動かされて仕事を受けたといわれる。そしてこの作品でフリッカー賞を受賞するのである。



黄色の光が溢れる回廊



ドアを開けると赤と青が飛び込んでくる